

可茂農林事務所の普及活動状況 （令和8年8月31日現在）

潜在力をフル活用した生産強化

■水稲・清流のめぐみ研究会 現地検討会を開催

今年6月に発足した「清流のめぐみ研究会」は、出穂期に続き、成熟期の8月21日に現地検討会を開催した。

当日は、「清流のめぐみ」を栽培する8経営体が参加し、生育経過や課題について生産者間で意見交換した。農林事務所からは、今年度の試験経過を踏まえ、生育の傾向や栽培管理上の課題を示し、対策について助言した。生産者からは、「栽培しやすい品種なので、来年は増産したい」と、面積拡大に向けた前向きな発言があった。

また、消費者の認知度向上に向けた方法を検討し、まずは農業祭等の機会を活用し、地元の人に「清流のめぐみ」の魅力を知ってもらうためのPRを実施することとなった。

農林事務所では、試験結果を取りまとめるとともに、来年度に向けた課題を整理し、地域に適した栽培方法の確立に向けた試験の提案等を行っていく。
(地域支援第一係)



【穂の出来栄を確認】

■水稲・可児地域稲作農家 可児地域水田農業現地検討会を開催

8月18日に農林事務所は、可児地域（可児市・御嵩町）の稲作の担い手に参加を呼びかけ、水田農業現地検討会を開催した。

近年、記録的な高温の影響で、米の品質低下・収量減少・病害虫増加などを引き起こしており、高温耐性品種の導入や施肥管理の改善等が課題となっている。そこで、今後の米政策の動向を見据え、生産者同士が情報交換を行い、連携を深める機会を創出するため、検討会を企画した。

当日は稲作農家をはじめ24人が参加し、管内の先進的農業者による施肥・防除の考え方や新規の高温対策資材を活用した現地実証の取組について説明が行われ、参加者から「管内でも省力多収栽培が可能であることが実感できた」、「このような検討会を継続してほしい」などの意見が寄せられた。

今後、農林事務所では関係機関と連携し、可児地域の水田農業の振興と安定多収に向けた支援を行っていく。
(地域支援第二係)



【現地検討会の様子】

■水稲・可児市水田農業を営む法人 飼料用稲WC S再生二期作の収穫が始まる

可児市で水稲を生産する法人が、飼料用稲WC S（ホールクロップサイレージ）の再生二期作に取り組んでおり、8月25日に第1回目の刈り取りを行った。

同法人では、作業分散を目的に主食用米の生産に加え、飼料用稲WC Sの生産に取り組んでおり、生産された飼料は県内畜産農家の自給飼料として活用されている。需要の高まりを背景に、8月下旬の刈り取り後も伸長する稲体の有効活用を検討した結果、県内初の取組となる飼料用稲WC S再生二期作の実証試験を開始した。

第1回目の刈り取りでは、10aあたり10ロール程度の収量となり、計画以上の数量を確保することができた。収穫・調製した飼料は約2カ月間発酵させた後、県内の畜産農家へ供給される見込みである。

第2回目の刈り取りは、10月頃を予定しており、農林事務所は関係機関と連携しながら、引き続き取り組みを支援していく。
(地域支援第二係)



【収穫調製の様子】

■梨・柿 高温対策技術の実証

近年、高温化に伴って、特に梨「新高」では落果や煮え果、みつ症の発生が、柿「富有」では日焼け果の発生による出荷量や品質の低下が課題となっている。そこで、梨「新高」では従来よりも袋内温度の上がりにくい果実袋について、柿「富有」では従来の無袋栽培に対して果実袋の利用について、それぞれ7月に各30果の実証ほを設置した。

美濃加茂市山之上地区の梨および柿ほ場にて、7月以降、梨の果実袋内温度の測定、柿の果実表面温度の測定と、落果調査を週1～2回行っている。これまでのところ、実証区と慣行区の温度に大きな差はみられず、落果も同程度となっている。

農林事務所では、今後も温度測定を継続しつつ、収穫期には、梨「新高」では果実品質調査を、柿「富有」では日焼け果被害調査、着色状況などを調査し、コスト面や労力面も含めて慣行と比較検証を行い、高温対策技術系の普及を推進していく。
(園芸産地支援係)



【梨の果実袋実証ほ場】